

まあいい腫で…～おめめどうから幼児期へのお手伝い～

<幼児期へのお手伝い3>

3、一人でできることを増やす どうやればいいのかを伝えるための工夫

時間や予定を日常的に伝えるということ

園での日々の活動として制作物やお遊戯というものがありますね。

制作物や、お遊戯などには、まず見本を見せることです。制作なら見本や手順、お遊戯ならポーズを真似る写真などで「こんな風になりますよ」「こんな風にするんですよ」「こうすればできますよ」…と子どもたちに知らせます。

それも、子どもたちにとっては見通しになります。

園のような集団活動では、お子さん1人1人に達成感があるようにします。そのためには、「みんな一緒」にこだわらないことが大切です。それから、「できるように環境を工夫する」ことが、必要です。

「人と違う方法でもいいのだ」ということは…

幼児期には、「人と違う方法でもいいのだ」を子供にも(親御さんにも)、知ってもらいましょう。

みんなと一緒に求められ過ぎると、学童期以降「同じものじゃないといや」と必要な支援や環境を拒否するようになります。

この「同じじゃないといや」という気持ちが本人にも周囲にも大きくなることは、本人の家族の暮らしやその後にとって、「大きな損失」です。

例としては

● 同じ材料にこだわらない

例:くれよんが苦手→ペンにしてみる。ノリが指に付くのがいや→スティックノリにしてみるなど

● 同じ分量にこだわらない

例:半分は大人が作って、最後を手伝ってもらう。数や時間を、お子さんに合う分量にする。または、本人に選んでももらうなど

● 同じ事柄や工程にこだわらない

例:みんなは太鼓でも、タンバリンにしてみる。そのお子さんがやりやすい行動を、お遊戯に取り入れるなど。
作業の場合は、固定する道具(ジグなど)を使ってやりやすい様に工夫する。

●●● 子どもの成長のお手伝いということ ●●●

言ったらできる＝言わないとしない、手を引けばついてくる＝手を引かないとついてこない、ということ。

「子どもの成長へのお手伝い」のように見えて、これは全く逆のこと。残念ながら子供にとっては、成長の妨げになってしまいます。

ですから、障害があるから「口を出すこと」や「手をかけること」が良い事だ、という考えはなくしていきましょう。

幼児期であっても、大人の考えの押し付けばかりせず「本人のことは、本人に選んでもらうこと」を忘れずに、ゆるやかに選択活動を取り入れます。それは、子どもが一人でできる(子どもの自信であり、主人公になることであり)につながっていきます。

手を洗う、ものを準備するなど…躰に関わることも、まず口頭で指示をするのではなく「見えるもの」を使います。

まずは、子どもから要求があること、本人が使うものなどから二拓を始めます。

しやすい順番や場所、使いやすいもの、お子さんのタイミングを観察してください。

上記のようなことを理解して、そこから「できた、できた」と根気よく教えていきます。

必ず、環境(時空間の・人的な・コミュニケーションの)の方を工夫していきます。けて、子ども自身をいじらないようにしてください。

幼児・学童期は、人への信頼を作る時期

- ・自分のことを理解してもらっているという安心感
- ・わかる世界で生きること

この2つの構築が、この社会へ、周囲の人間への信頼感を生んでいくのです。